

月刊 ウィーン

Monatsmagazin Japanisch

現地オリジナル取材と編集で
ウィーンを伝える月刊情報紙

創刊平成元年 創刊31年目 Nr. 373

GEKKAN-WIEN 2020年12月号





杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 106

日本経済団体連合会は十一月九日、二〇三〇年に向けて(一)DX(五月に発表したデジタル技術に関する提言)を通じた新たな成長、(二)働き方の改革、(三)地方創生、(四)国際経済秩序の再構築、(五)グリーン成長の実現一を柱に新政策とともに推進すべき施策を提言する成長戦略を発表した。



<https://www.jaif.or.jp/journal/japan/5305.html>

「再生可能エネルギーのみならず、原子力を含め、あらゆる選択肢を追求し、使えるものは最大限活用することが重要」として、エネルギー政策を所管する経産省が主導し着実に議論していく姿勢を示した。

「再生可能エネルギーのみならず、原子力を含め、あらゆる選択肢を追求し、使えるものは最大限活用することが重要」として、エネルギー政策を所管する経産省が主導し着実に議論していく姿勢を示した。

同戦略では、「地球環境の持続可能性と豊かな生活が両立する社会」を未来像の一つとして標榜。新政策の目指している「二〇五〇年カーボンニュートラル」(二酸化炭素排出実質ゼロ)の実現に関しては、既存の取組では力不足と指摘。脱炭素社会を目指したイノベーションを一層加速化すべく、革新的技術の開発・普及を産業政策の中軸と位置付けた上で、次世代蓄電池導入などの国家プロジェクトを立ち上げ、産学官総力を挙げた取組が進むよう長期的な国費投入を求めている。

「再生可能エネルギーのみならず、原子力を含め、あらゆる選択肢を追求し、使えるものは最大限活用することが重要」として、エネルギー政策を所管する経産省が主導し着実に議論していく姿勢を示した。

「再生可能エネルギーのみならず、原子力を含め、あらゆる選択肢を追求し、使えるものは最大限活用することが重要」として、エネルギー政策を所管する経産省が主導し着実に議論していく姿勢を示した。

原子力についても、「欠くことのできない手段」と、重要性を改めて示した上で、継続的な活用に向けて、安全性向上の取組や再稼働の推進とともに、二〇三〇年までの建設着手を自指し新製炉(小型モジュール炉、高温ガス炉、核融合炉など)の開発を国家プロジェクトとして進めることを提言。一方で、再稼働が進まぬ状況下、建設・運転・保守を支える技術とノウハウの継承が喫緊の課題となっていることを強調。また、原子力の必要性に関し国が前面に立ち正面から論じるべきことも述べている。

「再生可能エネルギーのみならず、原子力を含め、あらゆる選択肢を追求し、使えるものは最大限活用することが重要」として、エネルギー政策を所管する経産省が主導し着実に議論していく姿勢を示した。

「再生可能エネルギーのみならず、原子力を含め、あらゆる選択肢を追求し、使えるものは最大限活用することが重要」として、エネルギー政策を所管する経産省が主導し着実に議論していく姿勢を示した。

「新成長戦略」と題する今回の提言について、経団連の中西宏明会長は、序文の中で「これまでの成長戦略の路線に一旦終止符」を打ち、『新』しい戦略を示す意気込みを表現して

「再生可能エネルギーのみならず、原子力を含め、あらゆる選択肢を追求し、使えるものは最大限活用することが重要」として、エネルギー政策を所管する経産省が主導し着実に議論していく姿勢を示した。

「再生可能エネルギーのみならず、原子力を含め、あらゆる選択肢を追求し、使えるものは最大限活用することが重要」として、エネルギー政策を所管する経産省が主導し着実に議論していく姿勢を示した。



「再生可能エネルギーのみならず、原子力を含め、あらゆる選択肢を追求し、使えるものは最大限活用することが重要」として、エネルギー政策を所管する経産省が主導し着実に議論していく姿勢を示した。

杉本純の原子力の話II 「ウィーンと京都」の第1回からの全記事が次のサイトに掲載されています: <http://wattandedison.com/Sugimoto.html>



W.A. モーツァルト レクイエム KV626 初演 1791年12月10日 ウィーン 聖ミハエル教会

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトは1791年12月5日0時55分、「レクイエム」を未完成のまま、ウィーンで35歳の生涯を閉じた。葬儀は12月6日か7日にシュテファン大聖堂の十字架礼拝堂で行われ、聖マルクス墓地に埋葬された。1791年12月10日に聖ミハエル教会でモーツァルトのための鎮魂ミサが行われ、モーツァルトの未完の「レクイエム」が初演された。教会に支払うミサの費用はエマヌエル・シカネーダとヨーゼフ・フォン・パウエルンファイントが受け持ち、聖ミハエル教会の音楽家たちはモーツァルトのために無償で演奏した。

